

---

**海風靡く、この島で。**

seafield

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

海風靡く、この島で。

### 【Zマーク】

2014

### 【作者名】

seafield

### 【あらすじ】

突如、東京の実家から「養う金がないから」という理由で追い出され、汐羽島しおはねじまという島で暮らすこととなつた中川遼なかがわりょう。

その辺境の島 汐羽島で送る波乱万丈（？）な日々。

## 第1章（前書き）

初めまして！  
初連載となります。楽しんでいただけたら幸いです^\_^

見下ろした景色、とこりものは初めて見るが中々見栄えするものだな。

丘の上から見下ろした果てしなく広がる蒼い蒼い海というものは、太陽の光の反射というプラスも加わって、それはもう自然の偉大さというか、神々しさというかを感じさせた。

芸術感性など全く持ち合わせていない俺ですが、この景色は心震わせるものとして認識できる。

幾重にも聞こえるカモメの鳴き声が風の音と共に流れていき、それに波音が加わって心安らぐハーモニーを創り出す。

……何て柄でもないことを言つてんだろう俺は。全く。どこの臭いセリフを吐きまくるボエマーだつてんだ。

やめだやめ。

空を見上げれば、海とはまた違つ青色をしていた。

夏を象徴するような入道雲が水平線の彼方に鎮座している。

地球　　いや、宇宙つて凄いよなあ。こんな景色創り出せるんだもん。

……と、景色にいつまでも感動している場合ではない。俺には今田中にやらなければいけない仕事というものがあるのだから。名残惜しみながらも海に背を向け、丘を下り街並みが広がる景色が広がる場所へと俺は歩を進めた。

「お前、一人暮らしどうする気ないか？」

親父がそんな妄言を吐いたのは1ヶ月前のことだった。

代々中川家では育児方針として放置主義をとってきた、らしい。勿論、その方針に則つて一人っ子である俺は、人間にとつての健康的で文化的な最低限度の生活を送らされていたわけだが。

そんな日々を送っていた中で、高校一年生の一学期の終業式が終わつた次の日。

先程の妄言を親父が吐きやがつた。

当然「はあ？」となるわけだが、親父は俺に反論する隙も与えず早口に捲し立てた。

「お前を養う金がないから、汐羽島しおはねじまという所でお前は一人逞しく生きろ。わかつたな？ いや、わかれ。よし、流石は俺の息子だ。それでは、これでさよならだ。じゃあな、息子よ。あ、これが船のチケットだ。どこの船かは自分で調べる。よし。ではもう会うことはないだろ？ アディオス！」

上記の言葉を5秒も掛からないで俺に言い終えた親父は、俺に旅行用の巨大な肩掛けのバッグを持たせ、俺を家から追い出した。

ドアノブを捻れば、ご丁寧にも既に鍵が掛けられている。

俺は小さく溜息を吐いたあと、船のチケットだけを頼りに船着場を目指したのだった。

いやいや、軽いな俺。家追い出されて悲愴に暮れることもしないで、自分の住を求めに行くなんて。

何ともたくましくなつたものだ。誰かこんな俺を褒めてくれよ。

……そんなやついませんね。世知辛い世の中だもんな。

こんな性格になつたのも、一応、あのおかしなおつさん+飯だけを淡々と作つてくれていたお袋のおかげなのかなあ。いや、せいが？ どっちでもいいや。

などと、多少の自虐を混ぜつつ俺は決意、とまではいかないが、とこうかむしろ強制的にだが、汐羽島で暮らすこととなつたのであ

る。

回想終了。

回想短いな、おい。

一人暮らしをするというビッグイベントが起きよつとしているのに、それまでの過程<sup>プロセス</sup>これだけかよ。

……まあ、これだけだよなあ。

海風が煽る街の中を歩きながら、俺は「ははは」と乾いた笑みを浮かべる。

街は名も知れた街でもない割には綺麗な街だった。

住宅がある程度の間隔を開けながら、余裕をもつた感じで建て並んでいる。

丘から下ってきた道が街の一一番大きな道路となつており、その道路を中心に複数に小さい道路が枝分かれしている。

建物は全体的に白で統一されていて皆似たような姿形。

思つたよりも、中々小洒落た島じゃないか。

周りをキヨロキヨロ見回しながら歩くという、田舎者が都会に来たみたいな状態になつていて、田舎者が都會に来たみたいになつていて、自分が住むことになる街を観察するのには当然だと思っているから全く問題ない。

いやいや。別に景色に感動してキヨロキヨロ見回してたわけじゃないから。あくまで観察だから。そう、アイアムオブザーバーなの。あれ。こういう場合つて冠詞必要なんだっけ？

アイアムオブザーバー。

あ、違う。オブザーバーだから、冠詞はアンか。

……どーでもいいや。

本当にどーでもいいことを考えながら、俺は大きな道路を道なりに歩いて行く。

その先にあるはずの建造物を田指して。

\*

「ああ、君が遼くんだね」  
校長室にノックしてから入ると、校長の第一声は予想だにしないものだった。

「え、何で俺の名前」

「ああ。説明が遅れたね。私はこの学校の校長の佐倉だ。君のお父さんとは、まあ平たく言つなら友達だ」  
ああ。

どうして親父がこんな所に俺を寄越したかと思えば、なるほど少し  
テがあつたのか。

「君も大変だつたね」

「いえ。ところで本題に入つていただきたいんですけど……」

「おお。すまない。君は明日からこの高校に通つてもうつわけだが、  
この高校について何か教えてもらつたことは?」

「皆無です」

「そうか。それでは、まず教えとくことは、この学校は二学期制とい  
うことだ」

「一学期制?」

「つむ。文字通り一学期制だ。だから、夏休みどころのことは存在し

ない

「マジで!?

高校生活に夏休みが存在しないなんてあって良いものだらうか、いや良くない。絶対良くない！

「落ち着きなさい。その代わり秋休みがある」

「え、秋休み？」

聞き慣れない単語に思わず首を傾げる。

「そうだ。まあ、もうしばらく先の話だけどね」

「あ、そうつすか」

「それで」

それから校長の話は30分近く続いた。  
要約するとこんな感じだ。

「……、汐羽高校は一学期制を取つてゐる。

明日から学校にこい。

集合時間は八時半で、職員室に教材は用意されているから、それらを持ってから担任と共に教室へ行け。

制服はまだ準備出来ていないため、前の学校のを来てこい。

以上。

……何でこれだけのことを伝えるのに、30分も掛かつたんだろう。不思議なことに自分でも何故かわからない。

校長の口車に上手く乗せられたということか。いや、これ意味違うし。

……うん。どーでもいいな。

校長室から出て、物静かな廊下を歩きながら下駄箱を田指す。

「こんなにも静かなのは、今日が日曜日だからだろ？。時間を確認すると、昼の12時を少し回った辺り。

下駄箱で靴を履いて外に出ると、途端に汗が吹き出した。

校長室という涼しい世界から、いきなり猛暑の世界へと旅立つたのだから仕方あるまい。

先程まではあまり気にならなかつたのに。畜生、校長め。

などと理不眞な怒りを校長にぶつけながら、俺は次の仕事へと向かう。

「このアパートなら、一人暮らしするには充分な広さだと思つし、かなり安いからお勧めだよ。

校長から授かった情報と地図を元に、「住」のためのアパートを探す。

交差点を曲がって、交差点を曲がって、交差点を曲がって……

わかるかああ

何だこの地図はああ

完全迷子だよおお

……

「……

よし、落ち着け俺。

慌てたつて、何も良いことはないぞ。

目を瞑つて一度深く深呼吸をし、脳に酸素を行き渡らせる。

心が落ち着いたのを確信してから、俺は再び目を開いて地図を見た。

「おお！ 先程まではわからなかつた地図が手に取る様にわかる！」

……わけないな。

冷静な脳で考へてもわからない地図つて、もはや地図って言わねえだろ。地図の意義が消えてるよこれ。

「はあ」

俺は一度肩に掛けてある無駄に重いバッグを下ろした。

さて。かれこれ、一時間近く歩いているわけだが、流石にこの炎天下でノーレストで歩き続けるのは厳しいものがある。どこかで休まないと

……あれ？

何だか体がふらつく。

やばい、馬鹿した。

この症状は知っている。炎天下の中、一時間近く　いやこの街にきてからだから一時間近くか。そんな長時間、一度も水を取らずにくそ重いバッグを持つて歩くという重労働をしていたのだ。

バタリ。

俺は地面に倒れこむ。

やべ。意識が朦朧としてきた。

そうだ。こんな時にこそ、保健の授業で習ったことが役立つんじゃないかな。

確かに、熱中症になつた時の対処方法は

「！」

俺は重大なことに気付いた。気付いて、しまつた。

……あれ、もう一人いなきや 出来ないじやん。

冷静に考えれば、いや今冷静な思考が出来るかなんてわかんないけど……そりや そりやな。

熱中症になつてるやつが何か行動起こすなんて、無理に決まつてる。

衝撃の事実に力が抜け、俺は意識が無くなつた。

\*

「ねえ、大丈夫？」

声が聞こえる。女の声だ。

やべ、幻聴まで聞こえてきやがつた。ん？ 幻聴？

いやいや、俺意識なくなつたんだから、これはあ、やべ。天からの迎えが来たのか。つて、何故そうなる。

「大丈夫？」

「み……ず」

「え？」

「水……」

渴き切つた喉から何とか声を絞り出す。

この女の姿は未だに瞼を閉じているため見れない。そう。今はただ体が水を欲していて、瞼を開くことも億劫になつていていたのだ。いや、それ以前に目が何か おそらくタオルなんだろうがに覆われている感触がするから開いたつて見えないのだろうが。

「水ね。わかった。ちょっと待つてて」

女が立ち上がり離れて行く気配がする。

優しい女だな。見知らぬ男の要望に何の文句も言わずに従つてくれるなんて。

そもそも道端で倒れている見知らぬ男を、こいつやって看病してくれていること事態奇跡だろ。

今時の女はビッチみたいな奴らばかりだと思つていたが、どうやらそうでもないらしい。ああ、世界よ。疑つて悪かった。この世にはこんなにも優しい女がいるんだな。

俺が感無量な面持ちに浸つている間 と言つても一分も経つていい に女が帰つてきた。

「起き上がる?」

「あ、ああ」

正直起き上がるのも億劫なのだが、そんなに甘えてばかりもいられない。

俺は体を起こし、瞼の上に置いてあるタオルを取る。

「はい、これ」

ようやく声だけだつた女と「」対面か。俺は声がした方を向いた。

「……」

息を飲む。思わず絶句してしまつた。

薄く茶色がかつたセミロングの髪。端正な顔立ち。茶色の瞳。白いワンピース。

一瞬、本当に天使かと思った。いや、天使と言つよりも女神かもしれない。

それほどに女は綺麗だった。俺が出会つてきた女人の人の中で一番。「どうしたの？ 体調悪い？」

思わず見惚れ、固まつてしまつた俺を女が心配する。

「あ、悪い。大丈夫だ」

俺は女が持つてきたジョッキ一杯の水を つて、ジョッキかよ。何でコップじゃねえんだよ。ジョッキで水飲むやつとか始めて見たよ。ん？ あ、でも飲むやつは俺か。なるほど。初めては俺自身といつわけか。

初めて俺がジョッキで水飲む俺を見た。

……何言つてんだ、俺は。どうやらまだ俺の頭はおかしいらしい。  
……自分で言つておいて自分で悲しくなつてきた。

うわつ、俺面倒臭い奴！

「おーい。飲まないの？」

女は水が入つたジョッキをグイッと突き出す。

やはり、違和感満載だなこれ。

だが、喉がカラカラなのも事実。

背に腹はかえられない、といつやつか。

俺はお礼を言つてから、女からジョッキを受け取り中身を飲み干せない。いや、流石にジョッキ一気飲み（しかも水）は無理です隊長。

「ふはあつ」「

三分の一程の水を飲み終えてから、ジョッキから口を離す。

ああ、水つてこんなにも美味しかつたんだな。

渴き切つた砂が水を吸収するかのごとく、俺の喉は潤いを取り戻す

した。

「どう? まだ体調悪い?」

女は俺からジョッキを受け取ると、またもや不安げに尋ねた。  
うーん。何て優しい女なんだろう。綺麗な上に、性格まで良い。  
人間こんなに出来てていいのか?

「ああ、もう大丈夫。水飲んだおかげで、大分回復したよ」

「そう。なら良かった」

女は一口ひと微笑んでから、ジョッキを片付けに襖の奥へと消えた。

そういうえば、ここは

辺りを見渡せば、一面畳で埋め尽くされている部屋。その真ん中に布団が敷かれ、俺はそこに座っていた。  
タンスに押入れ、壁に掛かっている家の形をした時計以外に特に家具は置かれていらない。

よく言えば純和風の昔ながらを感じさせる佇まい。

悪く言えば質素で地味。

おそらく彼女の家なのだろうが、彼女の部屋と云うわけでもなさそうだ。

……て、情景描写している場合じゃない。

時計を確認すれば、既に夕方の六時を回っている。いつまでもお世話になるわけにはいかない。

俺は布団から抜け出して、丁寧に畳む。

「ちょっと、もう起き上がって大丈夫なの?」

「ああ、もう大丈夫だ。色々お世話になつたな」

後ろから掛かつた声に、バッグを背負つて振り返つてから礼を告げる。

「じゃあな。本当にありがと」

俺は半ば呆然としている彼女にお辞儀をしてから扉を開き、外の黄昏世界の中へと旅立つた。

夕方だというのに、未だ暑さは健在で思わず溜息を吐く。

さて、ヒ。今からやる」とせ……

「…………」

ピーンポーン。

「はい……え？」

「すまん。このアパートの場所わかるか？」

「彼女の家に引き返すことだつた。

いや、俺馬鹿にも程があるだろ。熱中症になつた理由思いで出せよ。ましてや彼女の家がどこにあるのかなんて知らないんだから、尙更迷子状態だろうが。

「ふ……ふふ」

と、散々自分を罵倒していると、彼女が突然吹き出したように笑い出した。

「……馬鹿で悪かつたな」

心優しき彼女にまで馬鹿にされるなんて、俺よつぽじ馬鹿なんだな。いや、どちらかと言つとアホなのか。

「違うの」

「え？」

「先程堂々と家出でていったのに、すぐ戻ってきたのがおかしくて」「やつぱり馬鹿にしてんじやん！」

やべ。今のは不意打ちだつた。

違うと勘定されて希望が開けてきた所からの、突然のシャットアウト。

思わず地面に跪いて地面を殴りまくる。いや、思わずでこんなに地面殴つちやうのかよ俺。卑屈すぎるだりー。

「え、ちょっと、『めんね？ まさか、そんなに傷つける』こと言つたなんて」

彼女はオロオロしながら、しゃがみこんで、跪いている俺の顔を覗き込む。

「ああ大丈夫大丈夫。よくあるから」

「よくあるんだ!?」

彼女は驚きからか目が点になつていて。

「あ、それでさ。こここのアパートの場所わかる?」

「切り替え早いね……と、『海鳴莊』? あ、これなら、私の家の

近くにあるよ」

「お、マジで?」

「うん。ここから歩いて十分くらいじゃないかな」

「お、そうか。でさ、悪いんだが……」

「あ、うん。案内してあげればいいんだよね?」

「女神!」

「え?」

「いや、余りにも良い人すぎて、女神みたいだなあつて

「あはは。大げさだよ」

「大げさじやないつて。東京行つてみ? ビッグチばつかだから

「ビーチ?」

「いや、ビッグチ」

「……『びつち』つて何?」

「……すまん。俺が悪かつた」

「え?」

「知らない方がいい」

「え、何それ? 気になるよ」

「君は純粋で無垢なままでいてください」

「意味わからぬいよ?」

「とりあえず、知らなくていい。忘れてくれ」

「?」

彼女は訝しげな表情をしていたが、俺が断固拒否の姿勢を保ち続けると諦めたかのように尋ねるのを止め、「それじゃ行こつか」と歩き出した。

俺は彼女の隣に並んで茜色に染まる街並みの中を歩いて行く。

「そういえば今更だけど、あなた引っ越してきたの？確かに今更だ。」

「ああ」

「お父さんとお母さんは？」

「東京にいるよ」

「え？ あなただけが引っ越してきたの？」

「そ。親父らは生活費足らないからって、俺を追い出したの」苦笑混じりに、傍から聞くと重い内容をのつけからんと話してみせる。

「……淋しくないの？」

「全然」

「俺はハハツと乾いた笑みを浮かべる。

「そつか……逞しいんだね」

「そう。俺は逞しいのだ。……逞しい方だと思つ。」

「ああ、悪いな。何か空氣暗くなっちゃつたな」

「つうん。元々私から質問したんだし」

「話変えるか」

「そうだね」

「そういえば、今更だけど本当にありがとな。下手すりや俺死んでたよ」

「ホントびっくりしたよ。買い物から帰つてたら、道端で人が倒れてるんだもん」

「迷惑おかげしました」

「お辞儀をして謝罪を述べる。

「水分取らないでいたんでしょ？ この暑い中水分取らないなんて、熱中症なりにいつてるようなものだよ」

「彼女は呆れたように溜息を吐いた。

「いや、俺も水分取らなきゃヤバイつてことに気付いたのが、倒れる直前だつたから」

「喉渴いたつて思う前に水分取るべきだつて。喉乾いたと思つた時

点で既に脱水症状起きてるんだから

「そうなのか？」

それは知らなかつた。つまり、喉が多少乾いていても我慢することが多い俺つて、いつ熱中症になつてもおかしくなかつたってことか。

「詳しいんだな」

「まあね。医学関係の本は昔読み漁つてたから」

「医者目指してるのか？」

「まさか。私が救いたかつたのは一人だけだから」

「一人だけ？」

「！ な、何でもない。今の忘れて」

「え？ なん？」

「忘れて」

「なんで？」と聞こうとしたが遮られてしまった。

まあ、話したくない内容らしいし、深く追求するのはよくないな。

「ん、わかつた」

「ありがと」

彼女は安堵からか頬を緩ませた。

「あ、ここだよ」

「おお。話している間に着いたようだ。」

顔を上げれば、思ったよりもボロくない薄水色のアパートが鎮座していた。外壁にシミなどは見られるものの、ひびなどは見られな  
い。

「それじゃ、私もう行くね」

「ここまで案内してくれた彼女にお礼を一通り述べてから、俺は彼女の背中を見送つた。

「……あれ？ 何か大事なこと聞き忘れてないか？」

「ちょっと待つて！」

彼女はキヨトンとした表情でこちらを振り返る。

「君、名前は？」

そう。あれだけ長い時間一緒にいたにも関わらず、お互に忘れていたのだ。

何とも抜けている。……お互いに。

「私は坂本西夏。西の夏と書いて西夏だよ。あなたは？」

「中川遼。遼の漢字はしんにょうを使うやつ」

「中川遼、ね。わかつた。それじゃ、またね中川くん」

坂本は再び俺に背を向けると、暗闇の中へと姿を眩ました。

坂本西夏、か。

そういえば何年生なんだろ？

……そのことさえ聞いていない俺はやはり抜けている。

……同じ年だといいなあ。

何となく明日の学校を楽しみにしながら、俺はアパートの中へと入つていった。

## 第一章（後書き）

いいよで読んでいただきありがとうございます！

遅い更新となるかと思いますが、長い間で見ていただけたと幸いです。

感想、指摘などありましたら書いていただけたと、作者が飛び上がり喜びます（笑）

これからよろしくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9201y/>

---

海風靡く、この島で。

2011年11月27日16時54分発行